

学びのたより

東海国語教育を学ぶ会
2020年1月11日
文責：JUN

子どもの内から生まれる学びを目指そう

あけましておめでとうございます。

2020年（令和2年）、東京オリンピックが開催される年です。日本中にどのような興奮と感動が沸き起こるか楽しみなことです。しかし、それは7月、それよりも前に、私たち学校人にとっては重大な節目に立ち向かわなければなりません。新学習指導要領全面実施です。

学習指導要領の改訂はこれまでも何度か行われてきましたから、これまでと同じように「またその時期がやってきたか!」と思っている人がいるかもしれません。けれども、今度ばかりは、この節目の重大性を感じないではられません。

その意味を考えるためにも、これまでほぼ10年ごとに行われてきた学習指導要領改訂の変遷を概括してみましょう。

1 学習指導要領の変遷

- 1947年 終戦から2年たったこの年、学習指導要領（試案）発表。経験を中心とした授業改革実施。いわゆる「はいまわる経験主義」という批判が出る。
- 1958年 全面改訂を行い、法的拘束力を有する国家基準となる。道徳の時間新設。基礎学力充実。
- 1968年 量的にも質的にも濃密なカリキュラムによる要領に改訂。そのためか学力格差が顕著になり「落ちこぼれ」と揶揄されるようになる。
- 1977年 教科内容の精選により学習負担の適正化を図る改訂。「ゆとり」がキーワードになる。
- 1989年 個性や多様性を重視し、思考力や問題解決力を重視した新学力観の育成をうたった改訂が行われる。ここで生活科が生まれる。
- 1998年 学校完全5日制が確立し、「ゆとり」を継続しつつ、自ら学ぶなど生きる力の育成をうたった要領に改訂。「総合的な学習の時間」創設。
- 2007年 学力低下問題とゆとり教育批判沸騰を受けて、授業時数、指導内容の増加、充実を図る。全国学力・学習状況調査実施始まる。
- 2017年 「主体的・対話的で深い学び」を示す新要領を告示。2020年度全面実施。

実におおまかなものでしかありませんが、こうして眺めてみると、学習指導要領は、その時々国内、国際情勢の影響を受けて揺れているように見えます。その揺れ方でまず目につくのは、指導内容や授業時間数が増やされたと思ったら削減され、削減されたと思ったらまた増やされるといった一貫性のなさです。その背景には、学力に関する考え方のせめぎ合いとともに、校内暴力、学力低下、不登校、いじめなどといった学校教育を取り巻く状況があり、そういったものへの対策をその都度行っ

てきた結果だとも言うことなのでしょう。

学習指導要領がそのときどきの社会状況や学校の状況に応じて変化するという事は仕方のないことです。子どもたちはその社会と学校の中で生きていくのですから。しかし、その一方で、教育は、子どもたちを人間としてどのように育てていくのかという揺るぎない人間観、教育観に基づいて、20年後、30年後を見つめた芯のあるものであってほしいと願います。子どもたちこそ、わが国の未来を形作るのですから。しかしその芯にあたるものまで揺れているように感じられるのはかなしいことです。

この変遷の中で、一つだけ言っておきたいことがあります。それは、1977年から2007年の改訂までの要領についてです。これは、皆さんもご存じのように「ゆとり教育」という名のもと、強い批判を浴びることになったものです。

その批判に対してどうこう言うつもりはありません。ただ、その30年のうちの25年を現役の教師としてあるいは指導主事として学校教育に携わり、子どもの教育にかかわってきた一人として、見落としてもらっては困ると思うことがあるのです。

それは、私や私が知っている多くの教師たちは、そのとき、学びが子どもの側から生まれる授業づくりに取り組んでいたということです。私に限って言えば、氷上正氏の指導を受けて学校ぐるみで「子どもが生きる授業」に取り組み始めたのが1978年であり、それが1985年の「子どもの読みから始まる文学の授業」に続き、その記録をもとに『子どもとともに読む授業』（国土社）を著したのが1988年でした。このとき私の「学び合う学び」の原型が生まれたのです。つまり、「学び合う学び」は、いわゆる「ゆとり教育」の最中に誕生しているのです。

まもなく2020年度になり新学習指導要領が全面実施になります。その指導要領の柱になっている「主体的・対話的で深い学び」が、私に取り組んできた「学び合う学び」と深くつながっている、このことは何年も前からずっと言い続けてきていることですが、その原型がいわゆる「ゆとり教育」の最中に誕生したということはどう受け止めていただけるでしょうか。

それは、私個人の実践上のことではあるのですが、今、振り返って感じるのはその時代の状況とはまるでかわりのないことだったとは思えないのです。つまり、これから始まる「主体的・対話的で深い学び」とつながる考え方が、その時代にもあったのだと思うのです。

そう考えて浮かぶのは「新学力観」です。

「ゆとり教育」が始まる1977年の改訂で、「自ら考え正しく判断できる児童生徒の育成」という文言が記されました。その背景に「学校教育が知識の伝達に偏っているという指摘」があったと述べられていたことからすると、やみくもに教えるのではなく、子どもの主体的な学びにしなければならないということが打ち出されたのとらえてよいのではないのでしょうか。その方針が、10年後の1989年の改訂で思考力や問題解決力を重視する「新学力観」として登場することになったのです。ちなみにその時の要領には次のように記されています。

学校の教育活動を進めるに当たっては、自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力の育成を図るとともに、基礎的・基本的な内容の指導を徹底し、個性を生かす教育の充実に努めなければならない。

この「新学力観」は、その後も継続され、さらに 10 年後の 1998 年、その実現の最先端を担うべき「総合的な学習の時間」を登場させたのです。

ご承知のように、このときの改訂は、学校週 5 日制に関連した学習内容と時間の削減を行っていました。「総合的な学習の時間」はその削減と抱き合わせで実施になったのです。こうして、学習内容と時間の「削減」が学力低下の原因だとして問題にされ、それを生み出したのは「ゆとり教育」だという強い批判にさらされてしまうことになりました。そのあおりかどうかはわかりませんが「総合的な学習の時間」は形骸化の一途を辿るのですが、それとともに「新学力観」に対する意識も薄れていったように思います。

私の「学び合う学び」は、そんなとき生まれているのです。それは、私に言わせれば、学力低下の大きなうねりに飲み込まれてしまっていた「新学力観」と、その趣旨を盛り込んだ「総合的な学習の時間」という考え方と無縁ではなかったと思っています。

そう考えると、表面的にはころころと変えられているように見える学習指導要領も、ひょっとしたら「芯」になるものは変わらず存在していたのではないかとさえ思うのです。

2 新学習指導要領の重要性とは

昨年末、OECDによる学習到達度調査（PISA）において日本の 15 歳の子どもの「読解力」が凋落したという報道が出ました。その読解力は、今回から導入されたコンピュータ使用型テスト（CBT）で測られ、なかでも、「記述式」で答えなければならない設問に対する落ち込みが顕著だったということです。この結果でまず受け止めなければいけないのは、日本の子どもたちは、引き出したいくつかの情報を対比・判別する読解力に課題があるということです。読解力は、デジタル化社会を見据えたとき、特に重要なリテラシーであるだけにこれは看過できないことです。そしてもう一つ、それ以上に看過できないのが、「記述式」が特にできていなかったということです。

私は、この報道に接したとき、そういう危機感を前々から抱いていただけに「さもありなん」と思いました。と同時に、なんとかしなければならぬし、なんとかするのには、今は、よいタイミングなのではないかとも思いました。前述したような学習指導要領全面実施の時期だったからです。

しかしそれには、全国の教師はもちろん、一般国民もその重要性に目をむけなければならないし、その実現にはシステムや制度の整備が欠かせないことから、とりわけ為政者の見識が問われることとなります。そう考えると、事はそう簡単なことではないことに気がつきます。

その難しさが典型的に表れたのが、「大学入学共通テスト」における記述式問題見送りです。

共通テストに記述式がどういう経緯で出てきたのか、そしてそれがどういう経緯で頓挫したのかについて、私には報道された範囲の理解しかありません。ですから、その是非を論ずることは控えます。それよりも、これからの時代を生きる学力を測る方法として、国際的に重要視された「記述式」が、しかも、日本の子どもの結果が凋落したというのに、いとも簡単にやめることになってしまったという事実をどう考えればよいのかと悩んでしまうのです。

私には私の思いがありますが、それをこんなところで述べても詮無いことです。それよりも、子どもたちの未来に目を向け、どういう方向に舵を切らなければならないかを、教師だけでなく、一般国民も為政者も、みんなして理解・調整するということがどんなに難しいことなのかを改めて思い知りました。

最近、Society5.0という言葉が未来社会を語るキーワードのように言われるようになりました。この言葉は、2016年、第5期「科学技術基本計画」において内閣府が提唱した言葉で、狩猟社会(Society1.0)、農耕社会(Society2.0)、工業社会(Society3.0)、情報社会(Society4.0)に続く社会のことです。それは、現在進行中の第4次産業革命で行われている、ビッグデータ、IoT、AI、ロボットなどの技術革新によって生み出される社会のことです。つまり、子どもたちが社会人として生きる10年後、20年後以降、世の中は確実にIT化しています。それは私などの想像を超えるほどのものになるでしょう。

ですから、これからの教育で大切なのは、子どもたちをAI時代に活躍できるようにすることです。もっと言えば、AIに頼り、AIに従う生き方ではなく、AIを活用するけれど、それだけでなく、AIでは代替できないものを生み出せるような人材を育てていくことなのです。PISAの読解力の問題がCBT(コンピュータ使用型テスト)に移行したものだということは、その方向を端的に示しています。

メディアはしきりに、AIの発達によって今ある職業の6割近くがなくなっていくということを報じ、仕事がなくなるということのみを強調していますが、もちろんそれもあります、この危機感はずっと深く、人間らしさの喪失につながる大きなことなのではないでしょうか。

そういう時代を生きるには、「考える」という行為を失わないことです。どれだけ便利だといっても、AIに頼り、AIに任せてしまってはならないのです。AIが発達する時代だからこそ、「自ら思考する」ということがとっても重要なのです。課題意識をもって、それぞれの関心に基づいて、自ら思考し探究し、AIを利用することはあっても、それぞれの子どもが、それまでの自分にはなかったものを自ら発見していく学びをつくりださなければいけないのです。それが、今、本気になって求められているのです。そのことを怠ったら、人間から人間として大切なものが失われるからです。新学習指導要領の「主体的・対話的で深い学び」は確実にそのことを意識したものです。それは、単なる指導法の流行ではないのです。私たちの未来につながる重要なことなのです。だから、後3か月後に始まる新しい一年は、教育にとってとても大切な節目になるのです。

3 何をどう実践するか

当然のことですが、人の考え方は決して一様にはなりません。様々な考えを有する人が存在して社会は形作られているのです。学校教育も同様です。ですから、いろいろなことが一様にはならないのは特異なことではありません。ただ、大切にしなければいけないのは、差異が対立し分断をもたらすか、互いの差異を尊重しその差異から学び合うことができるかの違いです。このどちらになるかは、学校の場合は、学ぶ子どもに大きな影響を及ぼす重大なことです。

長年学校教育の現場にいた感覚から言うと、いくつもの教育観が複雑に絡み合い、それらが常にしのぎを削っていたし、そのしのぎ合いが個々の教師の教育観を揺らし続けていたように思います。それはある意味、仕方のないことです。ただ、そのしのぎ合いの中から、このことはどんなふうに考え、どんなやり方をするにしても、欠くことのできないことだという共感を抱くことのできた学校とそれができなかった学校とでは、学校全体の子どもの状態に大きな違いが生まれていたように思います。「芯」にあたるものが共有されていない組織では人は育たないのです。

昨年は日本ラグビー大躍進に日本中が歓喜しました。それは、単に勝ち進んだというだけでなく、戦う選手のチームとしての姿に心打たれたからです。「one team」という言葉が流行語になったこと

がそれを象徴しています。しかし、選手一人ひとりには個性に満ちて輝いていました。一人ひとりに存在感のない組織は力を持ちません。しかし、前述したように、「芯」にあたるものが共有されていない組織も力を持たないのです。

話を学校教育に戻しましょう。学校教育の現場で、最も顕著に、最も強く教師を惑わせてきた考え方の違いとはどういうものだったのでしょうか。小さい異なりは数えきれないほどあります。そのなかにはそれぞれの手法として認め合えばよいものも多くあります。それはそれでよいでしょう。けれども、この後に述べる二つの異なりは、私に言わせれば学校教育の「芯」に当たるものであり、それを中途半端に放置しては組織として子どもに向き合うことはできないと思っています。

その異なりとは、「教育は内部からの発達である」という考え方と「外部からの形成である」という考え方です。

前者は、学びは、子ども自身の内に意欲と課題意識が生まれ、それが子どもの願いや目的となり、子ども自身の探究によって生みだされるものであるという教育観であり、後者は、学校の主たる任務は、過去につくられた知識や技能を次の世代に伝達することであり、そのためには外部、つまり教師によって系統的に教授するものであるという教育観です。

最初に断っておきますが、この二つのどちらかが完全に正しくてどちらかが完全に間違っているというものではありません。ですが、前述したような今の時代にとって、どちらに比重を置かなければいけないかは明らかなのではないでしょうか。それは、「教育は内部からの発達である」という考えのほうです。

新学習指導要領の総則に書かれていることを読んでみることにしましょう。

第1 小学校教育の基本と教育課程の役割

2 学校の教育活動を進めるに当たっては、各学校において、第3の1に示す主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を通して、創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開する中で、次の(1)から(3)までに掲げる事項の実現を図り、生徒に生きる力を育むことを目指すものとする。

(2) 基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等を育むとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かし多様な人々との協働を促す教育の充実に努めること。その際、児童の発達の段階を考慮して、児童の言語活動など、学習の基盤をつくる活動を充実するとともに、家庭との連携を図りながら、児童の学習習慣が確立するよう配慮すること。

先ほど私は、「AIに任せてしまってはならない。AIが発達する時代だからこそ、課題意識をもって、自ら思考し探究し、AIを利用することはあっても、それぞれの子どもが、それまでの自分にはなかったものを自ら発見していく学びをつくりださなければいけない」と書きました。

それには、子どもの学びが子どもの内から湧きおこり、子どもの内で探究されるものにならなければなりません。もちろん過去に先人によって生みだされた知識を得ること、技能を身につけることも必要です。しかし、それは、子どもの内における探究において力となって働くツールになったとき学んだ意味が出るのです。

もともと教育は、子どもの自立を目指して行うものです。子どもたちが、成人してAI時代を生き

ることになったとき、自ら考える、とにかく取り組んでみる、すぐには結果が出なくても諦めずむしろそこに楽しさを見つける、そしてAIをそういう自分の探究を遂行するために活用する、そういう生き方ができるようにしたいのです。それには、そういう学び方を、子どものときから体験しておかなければなりません。

ということは、教師に必要な指導力は、わかりやすく早く正確に教えるということではなくなります。「主体的・対話的で深い学び」は、そういう指導力では実現しないからです。そのことをすべての教師が、今、本気で自覚しなければなりません。

その際、声を大にして言っておかなければならないことがあります。それは、そういう探究的な学びをすべての子どもに実現させるためには、「学び合う学び」がなんとしても必要だということです。1人の教師が大勢の子どもに指示を出し、発問をし、答えさせて板書して教えるという「一斉指導型授業」では決して実現することがないのはもちろんですが、探究的学びを行うにしても一人ずつ分断されていたのではできないのです。すべての子どもが、それぞれに探究するためには、困ったとき、わからなくなったとき、相談したりともに考えたり、ときには考えの違いをぶつけ合ったり、そういう状態をともにできる協同的に学ぶ仲間がなんとしても必要なのです。もちろん子どもたちの探究に寄り添い、支え、方向づける教師の存在も大切です。それは、前掲の学習指導要領に「多様な人々との協働を促して」と書かれているとおりです。その「協働」において、子どもたちは多様な「対話」をすることになります。だから「対話的」という文言が出ているのです。とにかく、学びにとって、一人ひとりの子どもが自分の周りの様々な人と対話的に学び合うことはとてつもなく大切なことなのです。

では、私たちは、今、何を、どう実践していけばよいのでしょうか。それは、皆さん、おひとりおひとりの現状に合わせて考えなければなりません。AIに頼る生き方にしないために自ら考えるという学び方が大切だと述べましたが、それと同じように、教師も、マニュアルを求めたり教育書に書かれた方法にあてはめたりするのではなく、何をどう実践するのかと自ら考えるべきです。もちろん、同僚など近くの人と対話的に取り組むことは望ましいことだといえます。そして、それぞれの学校、一人ひとりの教師が、そのときの子どもや学校や教師自身にとってもっとも有用な手立てを講じて実践を始めるべきです。

そのとき欠かすことができないのが、「芯」になるものについての共有です。その「芯」になるものとは、「教育は内部からの発達である」ということではないでしょうか。子ども一人ひとりが自ら考える、探究する、そしてこれまで思いもしなかったことを発見する、それは子どもの内から生まれる学びです。そういう学びができるようにするにはどう授業を改善すればよいのか、この共通意識こそがその学校のすべての子どもの「主体的・対話的で深い学び」を実現するのです。

あと3か月たてば、2020年度（令和2年度）が始まります。それは、これまでになかった重要な節目であり一里塚です。そのための意識を醸成し、学校内の共通意識を生み出せるかどうか、この3か月は極めて重要な日々になります。そんな皆さんのために少しでもお役に立てたらと、3月20日に古屋和久さんと「新学習指導要領全面実施直前・ふたり講演会」を行います。

皆さんの新しい年が、充実した一年になることを心より祈念しています。